

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過しました。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第14回 空襲で家を失い成田へ

よしおか たかこ
吉岡 宜子さん 昭和13年生まれ

国民学校に入学する前、私は糸間屋を営んでいた両親と東京の神田で不自由なく暮らしていました。しかし、太平洋戦争の影響で生活は一変。幼稚園には、防災頭巾を被り救急袋を背負って通うようになりました。また、食事のために鍋を持って雑炊の配給の列に並ぶようになり、その時の空腹の痛みは忘れられません。

戦争は激しさを増し、私たちは埼玉県にある母の実家に疎開しました。東京大空襲の夜、東京方面を見つめると、空が明るく燃え上がっていました。神田の家は蔵だけを残して全焼。大切にしていたひな人形の顔もぼろぼろになってしまい、とても悲しい気持ちになりました。

住む家を失った私たちが家と食べ物を求めている時、偶然にも父が成田に空き家を見つけ、家族で移住することになりました。

北須賀で触れた自然と人のぬくもり

下総松崎駅に降り立ったのは3月のまだ寒い日でした。地元の農家の人が、わらなどで編まれた敷物を牛車に敷いて私たち家族を迎えに来てくれました。その上、おにぎり、たくあん、印旛沼で取れた魚の甘露煮などのごちそうも用意してくれていました。駅を出るとシラサギが舞うのどこかな田園風景が広がり、牛車に揺られながら食べた白米のおいしさ、そして人々の優しさは今でも忘れられません。

引っ越し直後、祖父の葬儀中に米軍の爆撃機B29が低空



昭和10年ごろの水神の森(北須賀)と印旛沼(『成田の歴史アルバム』より)

飛行してきました。耳をつんざくようなごう音だったことを覚えています。

北須賀に引っ越してきて10日後、私は分校に入学しました。分校には1~4年生が通っていましたが教室は3部屋しかなく、午前と午後に分かれて授業が行われていました。時には、近くのお寺を借りて和服などを仕立てる作業台を机代わりに授業をすることも。教師も不足していて3・4年生と一緒に授業を受ける日には、お坊さんが先生を務めることもありました。食べ物も足りず、弁当を持ってこれない子やサツマイモだけの子もいました。私たちは学校の帰り道にシイの実を取ってそろばん袋に入れ、持ち帰っておなかを満たしました。台所や風呂で使うまきなどは休みの日に山で集めるのが習慣でした。

東京で糸間屋を営んでいた生活とは全く異なる田舎での生活に両親も戸惑っていました。私も子守り、食事の支度、水くみ、まき割り、お使い、山仕事、農業の手伝いとできる限りのことをしました。大人も子どもも本当に大変な時代でしたが、周囲の人々に助けられながら家族全員で協力して何とか乗り越えることができました。縁あって20歳で嫁ぎ、今ではこの素晴らしい自然豊かな北須賀でのんびりと暮らすことができています。戦争中に移住を決断した父には心から感謝しています。

子どもや孫、ひ孫たちが平和な世の中で安心して暮らせる日々が、これからも続くことを心から願っています。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年9月15日号 No.1539



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は9月4日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

先日、好きな音楽を聴きながらドライブを楽しんでいた時のこと。「パアーン」という大きな音に異変を感じ、車を止めて確認したところ、タイヤがパンクしていました。初めてのことで焦ってしまいましたが、親切なお兄さんのお兄さんに助けられ、なんとか帰宅することができました。パンクの原因は、なんと道路に落ちていた小さなくず。道路上の小さな障害物にも気を付けないと、と改めて実感した出来事でした。

リサイクル適性(㊟)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。